

## 権力と新聞の大問題

写真は集英社新書 6 月刊行の望月衣塑子さんとマーティン・ファクラーさんとの対談。メディアについて示唆に富む指摘が多い。

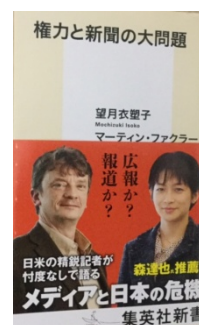
表紙カバー裏から一官房長官会見で記者として当然の質問を重ねることで、なぜか日本の既存メディアから異端視される東京新聞の望月記者。そんな「不思議の国・日本」のメディア状況を、彼女とニューヨーク・タイムズ前東京支局長マーティン・ファクラー記者がタブーなしで語りあう。政権とメディア上層部の度重なる会食や報道自粛の付度など、問題は山積している。はたしてメディアや記者クラブが守るのは言論の自由か、それとも取材対象の利益か。権力を監視・チェックするジャーナリズム本来の役割と部族化する言論空間の問題点、新メディアの可能性などの展望を示す警世の一冊。

二人の対談は刺激的であり、紹介したいことは多いが、ここではファクラーさん執筆の「おわりに」を途中まで紹介する。

新聞報道には、取材相手と密接な関係を築いて情報を得るアクセス・ジャーナリズムと独自取材による調査報道がある。日米ともそれは同じだが、アメリカの政治報道は政権の意図的なウソをそのまま報じて読者の信用を失うという苦い経験を重ねた末、アクセス・ジャーナリズムに頼ることなく調査報道に力を入れることで信頼を回復しようとしている新聞もある。トランプ政権以降はアクセスそのものをトランプ大統領が断ち切ってしまったから調査報道で行くしかない。

日本の新聞は記者クラブという「当局と記者が、いい関係を保って情報収集するシステム」のもとで作られている。記者が当局の機嫌を損ねないように付度をして記事を書く。記者会見でも、当局にとって都合の悪い質問を積極的にぶつける人はあまりいない。

ところが、望月さんは、官邸に乗り込み、官房長官に厳しい質問を突き付けて、強い力を持った権力者を恐れることなく立ち向かっていく。本当のジャーナリストの姿を私たちに見せてくれている。権力の監視役というジャーナリズム本来の役目を果たすために闘っている彼女に拍手を送りたい。そして、応援のメッセージを届けたい。そう思って、この対談をすることにした。ただ、望月さんが会見で鋭い質問を続ける姿が注目を集めるとするのは、実は歓迎すべきジャーナリズムの姿ではない。望月さんがやっていることは当然のことであり、逆に言えば、そうしない日本の大手メディアのほうが変なのだ。そういう望月さんをなぜもっと多くの記者たちが応援し、力を合わせて権力に対して鋭い質問をしようとししないのだろうか。



(2018年7月14日)